

渤海都城プランの発展およびその隋唐長安城との関係

魏 存成

吉林大学

渤海は紀元698年～926年、靺鞨族を主体として中国の東北地方を中心として、朝鮮半島の東北部、ロシアをふくめた広大な地域に建立した民族的地方政権であった。文献と考古資料によると、渤海政権が存在した229年間に、都城は四度、遷都した。最初の都は敦化で、史書に「旧国」とみえる。天宝（742～756年）中に、中京の西古城を都とし、天宝末に上京に変遷し、785年に上京から東京八連城に遷都した。794年に再び、上京にもどり、その後926年に遼に滅ぼされるまで、上京を都とした。上京城は2次にわたる都で、もっとも長く、規模も最大で、計画プランと建築は完備していた、都城と建築の面において、「海東盛国」といわれた文化様相をよくあらわしている。

I 渤海都城の計画プラン

(1) 「旧国」都城

敦化市（吉林省）は、牡丹江上流に位置する。敦化には重要な古代遺跡、城山子山城や敖東城などの古城のほか、六頂山墓群、永勝遺跡や江東二十四石建築址が分布する（図1）。敦化の北、鏡泊湖に至ると、牡丹江に沿う交通路に数カ所の城址、古城堡と二十四石建築址¹がある。曹廷杰や金毓黻が早くに考証し、敖東城を渤海初期の都城に比定した。1950年代末から60年代初、吉林大学と吉林省文物工作者が相い前後して、両都城の調査を進めた。

城山子山城は、敦化市の西南22.5kmの海拔600mの独立山塊に位置する。山の北側は牡丹江

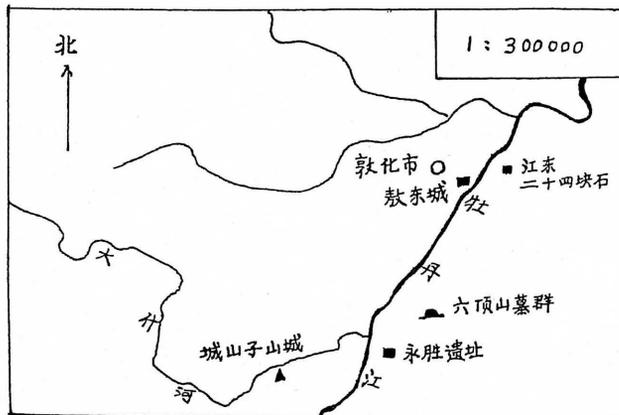


図1 敦化市区附近古代遺迹分布示意图

1 王承礼「吉林敦化牡丹江上游渤海遗址调查记」『考古』1962-11

の支流の大石河（かつて大什河という）が流れ、その河口は山城の東4.5kmにある。牡丹江東岸の永勝遺址とは5kmの距離で、東北の六頂山墓群とは7kmへだてる。山城の城牆は山復を土石混交で築成し、圍繞されている。周長2000m前後、山城に東西の二門が設けられている。城内の地形は西南が高く、東北が低い、東門内の南側の緩やかな山の凹地に50余戸の半地下式住居址が分布する。居住地の北側と西門内の100mに、それぞれ貯水池がある。城内に、数カ所の平らな台状部がある。城の内外で、かつて鉄矛・鉄刀・鉄鏃や唐の「開元通宝」銭がみつまっている²。

敖東城はまたの名を「顎多哩城」、「阿克敦城」などとよばれた。敦化市の東南部の牡丹江左岸に位置する。内城と外城に分かれる土城である。外城は東西400m、南北200mで、西・北・南壁がわずかにのこる。南門があり、内城の南門と相対している。内城は方形で、一辺長さ80mで、外城の中央部の西に位置する。そこは地形的に高くなっている。外に濠が圍繞する。敖東城では、かつて建物址が発掘され、渤海の陶器、唐・遼時代の磁器や鉄釜・鉄鎌・唐宋銭が出土した³。

『旧唐書』渤海靺鞨伝に渤海の建国について、「祚榮遂其率其衆東保桂婁之地、据東牟山、築城以居之」と記されている⁴。東牟山上に築城したことがわかる。渤海建国の地を敦化とすると、他の山城に比肩するものがなく、城山子山城はまさに東牟山山城にはかならないであろう。渤海最初の都城である。その後、敖東城を平野の中心と定め、城山子山城と一体となって、経済発展をとげ、軍事防守体制をととのえた。また敖東城の規模の大きさでは、日ましに増大する人口を収容しえず、一般居民、貴族をふくめ、城外に居住するようになった。永勝遺跡は、往時、城外に形成された居民の集住するところであった。

永勝遺跡は、城山子山城の東の牡丹江右岸に位置し、西は江に面し、東は低丘陵と続く。遺跡の北北東3kmに六頂山墓群がある。遺跡の範囲は比較的大きく、東西700m、南北1000mで、5カ所の建築址が発掘された。遺跡では、建築用の灰色瓦、唐の「開元通宝」や宋の「崇寧重宝」などの貨幣がみつまっている。永勝遺跡の面積は敖東城をこえていて、渤海初期の都城と推定する説もある。ただこれまで周囲で城牆関連の遺構は確認されていない。今後、永勝遺跡や城山子山城・敖東城の発掘調査の進行に期待される⁵。

(2) 中京顕徳府城址

渤海中京顕徳府城址は、今の吉林省和龍県西古城である。西古城の周囲は海蘭江流域の最大の平原、頭道平野である。西古城の北牆は延（吉）和（龍）公路に隣接し、西南50～60kmに

2 劉忠義「東牟山在哪里？」『学習与探索』1982-4。吉林省文物志編委會『敦化市文物志』1985。

3 単慶麒「渤海旧京址調査」『文物』1960-6。王承礼「吉林敦化牡丹江上遊渤海遺址調査記」『考古』1962-11、延辺博物館延辺文物簡編編写組『延辺文物簡編』66頁、延辺人民出版社、1988。吉林省文物志編委會『敦化市文物志』1985。李強「渤海旧都即敖東城置疑」『東北歴史与文化』遼瀋書社、1992。敖東城の内外城の規模については、記載に差があり、本文では『文物』1960-6の挿図を用いた。

4 「桂挹婁」『新唐書』渤海伝は「挹婁」とする。「渤海、本粟末靺鞨附高麗者、姓大氏。率衆保挹婁之東牟山…築城郭以居」

5 延辺博物館延辺文物簡編編写組『延辺文物簡編』66頁、延辺人民出版社、1988。吉林省文物志編委會『敦化市文物志』1985

和龍県が所在する。古城付近に、河南屯古城、龍頭山墓群、北大墓群など多くの渤海の重要遺跡が分布する⁶。

西古城は内城と外城からなる。外城は東西600m、南北730m、周長2720m⁷。城墻は版築されている。南北墻の間にそれぞれ門址がある。城にはもともと壕があったが、南墻東端と東墻南端外の小渠をのぞいて、すでに削平されている(図2)。

内城は外城の中央、北寄りに位置する。東西190m、南北310m。内城の北墻は外城の北墻と70m隔たり、南墻中段は対称的に内に折れ、中央部で開門する。門内の南北中軸線上に3基の宮殿址が配置されている。1号宮殿址は最大で、面積は300m²におよぶ。

1号宮殿址の北36mに2号宮殿址がある。2号宮殿址北側に外方向にのびる烟道のようなものがある。2号宮殿址の左右に脇殿がある⁸。1号宮殿、2号宮殿および2号宮殿の左右脇殿の間はすべて回廊で通じている。3号宮殿址⁹と2号宮殿址は80mへだてる。内部に横墻があり、その中央に門址が設けられている。内城の殿址で、配列した礎石や多くの陶製建築部材、下端に押圧文と斜線連圈文のある板瓦、筒瓦、蓮華文磚、忍冬唐草文磚、柱座、鷓尾、獸頭(鬼瓦)、緑釉で飾られた部材や文字瓦が発掘された。

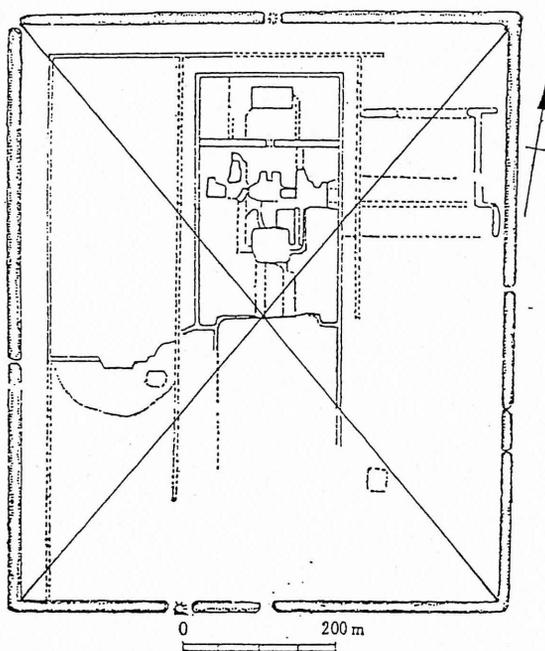


図2 西古城城址平面図

(3) 東京龍原府城址

渤海東京龍原府址は、いまの琿春八連城で、かつては半拉城とよばれた。城址は琿春河が図們江に流入する三角沖積平野に位置する。西25kmに図們江、東6kmは琿春市区である。城址付近に渤海の平原城、山城、城堡、墓群や寺院址が分布する。八連城の東、長嶺子山口を越えると、渤海日本道の海への出口のクラスキノ古城がある¹⁰。

八連城は内城・外城の両城からなり、いずれも土築で、外城は基本的に方形を呈する。最近

6 烏山喜一・藤田亮策『間島省古跡調査報告』1937。延辺博物館延辺文物簡編編写組『延辺文物簡編』延辺人民出版社、1988。吉林省文物志編委會『和龍県文物志』1985。

7 これは『延辺文物簡編』記載の数字。『間島省古跡調査報告』によると、640×720m。『和龍県文物志』には630×720m。

8 『間島省古跡調査報告』3号、4号。

9 『間島省古跡調査報告』5号。

10 延辺博物館延辺文物簡編編写組『延辺文物簡編』延辺人民出版社、1988。吉林省文物志編委會『琿春県文物志』1985。烏山喜一・藤田亮策『間島省古跡調査報告』1937。斎藤優『半拉城』1942。駒井和慶「渤海東京龍原府宮城址考」『中国都城・渤海研究』雄山閣、1977。

の調査によると、東牆746m、西牆735m、南牆701m、北牆712m、周長2894m¹¹である。城外に周濠がある。

内城は外城中央の北側にある。東西218m、南北318m、周長1072m。南牆中段は対称的に内に折れ、中間で開門する。南門を入ると、広場を過ぎて、内城の中央部にいたる。東西45m、南北30m、高さ約2mの大形宮殿址で、礎石が配され、多種な瓦が散布する。大形の宮殿址の北約32mのところに、東西21m、南北15mの、形態は西古城2号宮殿址と同様の建物がある。2基の宮殿址の間は、横牆で隔てられる。両殿のあいだの縦軸線上に両殿を結ぶ南北回廊があり、両宮殿址の両側に、おおよそ対称的な配殿（脇殿）がある。これらのあいだに暖房施設がある。

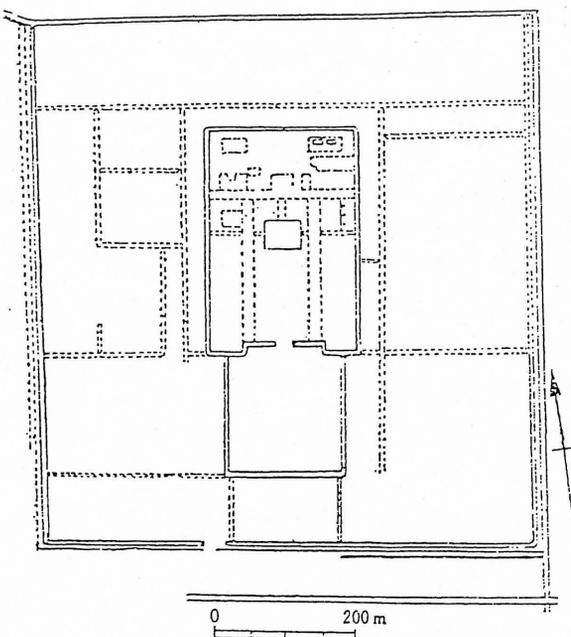


図3 八连城城址平面图

内城の南、外城の南牆まで南北に相接して、二つの区域（広場空間）を設けるが、中心軸上に位置し、門にあいつうじている。その二区域は、内城と接していて、文献記録にみえる「中央三城」である。「中央三城」の両側は、二つの独立した区域で、一独立区域内はまた小区に分けられている。内城の北側にある横牆は外城の東・西の両牆と接する。横牆の北と外城北牆の間に単独区域が形成されている。それはすなわち文献に記載された「北大城」である。それをくわえると、まさに8基の小城となる（図3）。

八連城の周囲に多くの仏寺が分布する。解放前、城址の東南数百m、城址の南の中軸線の両側に3基の仏寺址が調査された。解放後、再調査がなされた¹²。

上記の城内の各建築址や場外の仏寺址で出土した瓦は西古城と基本的に同じものである。

(4) 上京龍泉府城址

渤海上京龍泉府城址は、黒龍江省寧安県の西南35kmに位置する。牡丹江中流域の沖積盆地にある。老爺嶺と張廣才嶺が東西に聳えたち、盆地内に縦横に河川が流れ、土地は肥沃である。城址の西南方に、当時「忽汗海」といわれた風光秀麗な鏡泊湖がある。急流の牡丹江（忽汗河）

11 『延辺文物簡編』と『琿春県文物志』を引用。『間島省古跡調査報告』では700×740m、記載の数字は700×730m、『中国都城・渤海研究』記載の数字は700×750m。『渤海文化』記載の数字は南牆612m、東牆739m、北牆696m、西牆728m。

12 斎藤優『半拉城』。河明「試論唐代渤海的仏教」『博物館研究』1983-2。延辺博物館延辺文物簡編編写組『延辺文物簡編』83, 90-91頁。

の水は鏡泊湖から流れ、城址の西辺と北辺を迂回し、城址の東辺の馬蓮河水で合流し、北に流れてゆく。上京城は江湖に近接し、群山を遠望し。生活や防守に利便なところである。

上京城址内にいくつかの村鎮がある。そのなかでもっとも大きい鎮が歴史上永く、東京城とよばれてきた。近代では世環鎮（四環鎮）といわれ、現在は渤海鎮とよばれる。城址の東側約3kmの駅を中心として発展をとげきた鎮である。もとの名は「中馬河」で、のちに城址内の村鎮を渤海鎮と改名されたとき、その村鎮は東京城と名づけられた。

上京城は、長らく渤海の国都とみなされてきた。城址の内外にこれまで遺されてきた多くの渤海遺跡がある。かつ新しい重要な発見もあいついでいる。城址の北辺の地勢は低くなっている、そこに「玄武湖」とよばれる湖泊がある。湖中の小島の上に渤海の礎石と瓦片が散布する。城址の北方から、東北方に至る牡丹江面上に、もともと5基の橋梁があった。そのなかの城址北方の上官地古橋址は俗称「七孔橋」といわれる。全長160m、幅17mで、江水が下がったとき、石積みの粗大な橋梁、昔日の雄姿をあらわす¹³。城址の北方の牡丹江の対岸に三霊屯がある。以前に三霊屯1号大型石室墓が発掘されていたが、近年あいついで三霊屯2号壁画墓や三彩陶器が発掘され、渤海の王陵区に属することが証明された。

城址の西辺、牡丹江を過ぎると、中下等級に属する大朱屯墓群と紅鱒漁場墓群がある。後者は、発掘された渤海墓葬のなかで、一墓群としてもっとも多い。城址の西南15kmの杏山郷で、近年はじめて渤海瓦埠址が見つかり、発掘された。

上京城址の重要な考古資料として、比較的早いのは1939年に出版された『東京城』で、その後、1960年代初、80年代と90年代末に、いくつかの発掘報告が刊行された。¹⁴

上京城址の形態プランは、宮城・皇城と郭城の三部分からなる。郭城は東西に横方向の長方形を呈し、宮城と皇城は郭城の北部で、やや西寄りに位置し、皇城は前に、宮城は後、宮城の左右と北面にそれぞれ一付属区がある（図4・5）。

1. 宮城

(1) 城牆・城門

宮城は長方形規格を呈する。東西620m、南北720m、周長2680m。城牆は大小の玄武岩の整形石を用いて積築する。保存状況は良好である。高さ3～4mにおよぶ。

宮城の南・北牆の中間に門を設ける。南門が正門で、いまの「五鳳楼」のところでである。門址の真ん中に、高い基壇がある。東西42m、南北27m、高さは現地表から5.2m、深さ1.3～1.5

13 陳青柏「唐代渤海国上京龍泉府遺址—全国重点文物保護單位之一」『黒龍江省文物叢刊』創刊号、1981。朱国忱・金太順・李硯鉄『渤海故都』は、楊賓『柳辺紀略』記載の『橋九洞』を結びつけて、「今に称う七孔（空）橋は確かでなく、「七墩八孔」はまちがいで、楊賓は「橋九洞」とする。このように橋墩八基は「九洞」である。事実上、もとは8カ所の橋墩で、そのなかの1基は、江岸に近い橋墩の積石は人によって取り去られたもので、さらに流水の衝撃で石堆が減少し、水没した」とのべる。黒龍江省人民出版社、1996、611頁。

14 黒龍江省考古工作隊「渤海上京宮城第一宮殿東、西回廊遺址発掘整理簡報」、「渤海上京龍泉府宮殿第2・3・4号門址発掘簡報」『北方文物』1987-1。黒龍江省文物考古研究所・牡丹江文物管理「渤海国上京龍泉府遺址1997年考古新収獲」『北方文物』1999-4。黒龍江省文物考古研究所・牡丹江文物管理站「渤海国上京龍泉府外城北門址発掘簡報」、黒龍江省文物考古研究所・吉林大学考古学系・牡丹江文物管理站「渤海国上京龍泉府宮城第2宮殿遺址発掘簡報」『文物』2000-11。朱榮憲『渤海文化』（日訳本）、雄山閣出版、1979。中国社会科学院考古研究所編著『六頂山与渤海鎮』、中国大百科全書出版社、1997。

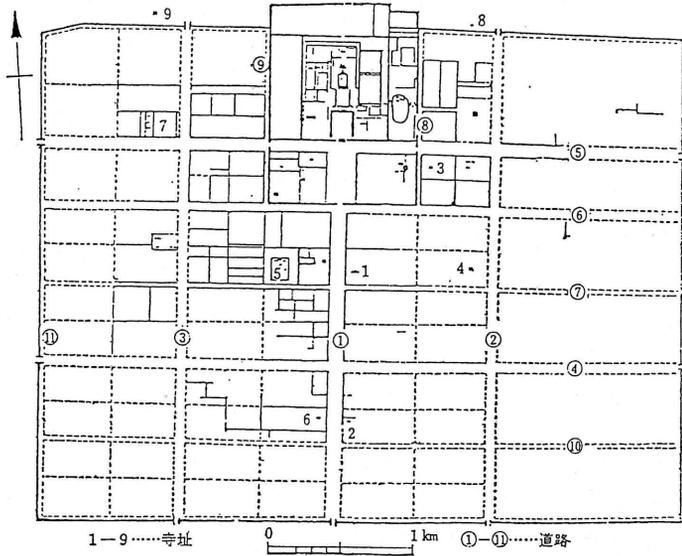


图4 上京城城址平面图

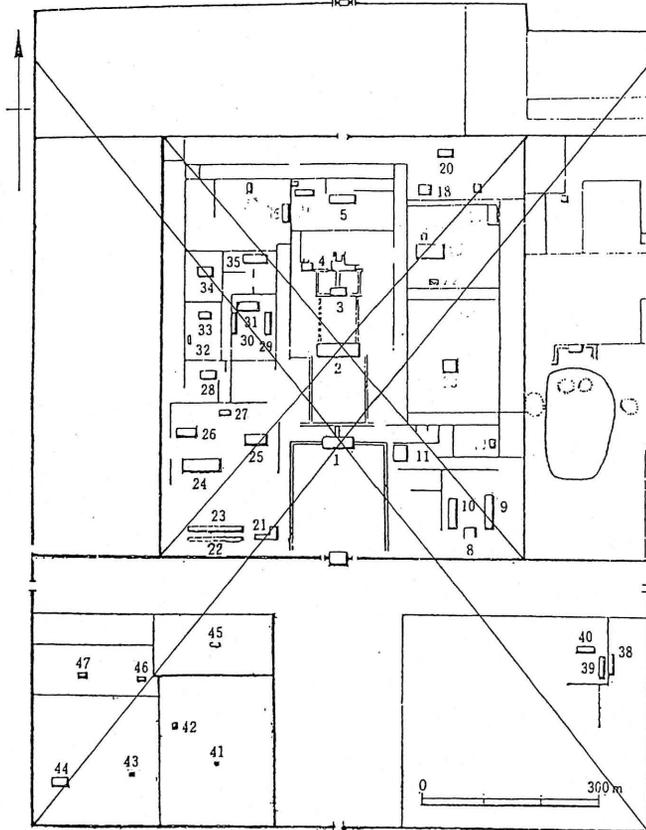


图5 上京城宫城、皇城及宫城附属区平面图

mである。基壇内は、砂土と卵石をまぜて版築され、外表面は玄武岩と細長い石を用いて、両道の石墻を覆って積み上げられている。基壇の上に礎石を配置される。東西方向7列、1列10石を並べる。門道は両道の石墻壁の上であり、焼成をうけた紅褐色の又柱の痕跡があり、梁構造と説明されている¹⁵。宮城正門の発掘で大量の瓦罫、石製螭首、鉄門枢や形が異なる鉄釘などが出土した。

正門の西門道の西57mに門道の側門、進門が発見された。殿前の広場と宮城の西区に通じている。門内の西側に小形の門房が発見され、門は東壁に開く。北壁西段と西壁にそって、灶とオンドルがある。発掘された主要遺物は、瓦罫のほか、日常生活用の鉄器・陶器があり、門房入り口の地層から1枚の「開元通宝」の貨幣が出土した。

宮城正門の東門道の東側約70mに、西側門と対称に同様の側門が設けられている。その側門は城墻南側修建の門墩よりであり、門道、城墻の北側に立柱痕跡がみつかった。大量の瓦罫と焼けた土の塊、灰、木炭、緑釉の瓦などが発掘された。比較的厚重的な門楼である。ただし門道は城墻を通っていない。発掘者は象徴的な仮門とみている。

宮城の南墻の外に城濠がめぐる。前述の城門のあるところは外に折れ気味となっている。発掘によって、城濠の上場は2.5m、底部1.65m、深さ1.8mで、白灰と河原石をねりあわせて底面に敷くことがわかっている。

(2) 宮殿址

宮城内部は、南北方向の墻によって東・中・西の3区に隔てられている。東・西区はそれぞれ幅157m、中間幅180m、各区内部はまた縦横の墻垣によって、いくつかの部分や院に分けられている。院は宮殿やその他の建築遺址で発掘されている。中区に建築遺構7カ所、東区13カ所、西区17カ所、計37カ所である¹⁶。

中区宮殿址 中区宮殿址は主として宮城南門内の中軸線上の5基の殿址をいう。

第1宮殿の基壇は南門の北175mで、東西55.5m、南北24m、高さ2.7mである。基壇は土で築かれ、四周に切石、外面に1段の長方形包磚が残存する。基壇正面の左右と背面の中間に石築階段が設けられる。基壇上に大形礎石が東西12石、南北5石、11間×4間である。出土遺物は、瓦罫のほか、緑釉鸕尾、獸頭（鬼瓦）や数個の螭首などである。

基壇両側は凸状で、低くなり、現地面に接している。東西両側の曲尺形の回廊址と通じている。両回廊の東西廊の長さは各50mで、東から西列に13個の礎石、北から南列に3個の礎石、縦横間の長さはほぼ同じで、4～5m前後が多い。そのなかで殿基壇の外に張り出す凸部分の南北両辺の幅1.5m前後を加え、東西15m、南北12mの区域をつくる。地面から約50cm、高くなっている。文献や大明宮含元殿の発掘にもとづくと、それは渤海官吏は殿の前面から後面の第二宮殿の門址¹⁷を通ったという。南北廊の長さは136mで、北から南列に30個の礎石を配する。間隔は4～5mが多い。西から東列に4個の礎石、そのなかの中間の2個の礎石は直径1.5m

15 丹化沙「渤海上京近年発現重要文物和遺跡」『遼海文物学刊』1988-2。

16 中国社会科学院考古研究所『新中国の発現与研究』623頁、文物出版社、1984

17 社会中国社会科学院考古研究所西安唐城工作队「唐大明宮含元殿遺址1995-1996年発掘報告」『考古学報』1977-3。

前後で、間隔は6m前後である。両辺の礎石の直径は1m前後で、それらは中央の2個と4.5m前後へだてている。この曲尺形回廊は、明らかに宮内その他の回廊より広くつくる。南北廊の外側の礎石の間は、厚さ約0.25mの土墻基底部が発掘された。墻の中間に直径約20cmの木柱があり、墻外面を土壁（草泥）として、内側を2cm前後の厚い白灰皮を沫し、上に紅色彩絵をほどこす。南北廊の内側に排水溝があり、回廊名地面を黄粘土を敷く。発掘で、青灰色で、内面に布目、外面は無文の板瓦・筒瓦、長方形青色磚や蓮華文方形磚、鉄釘などが出土した。

第1宮殿の前、左右の曲尺形回廊は、その位置・方向などからみて、唐長安城の大明宮含元殿と左右前方の翔鸞閣や栖鳳閣の間の廊道に相当する。またその役割は同じ翔鸞閣や栖鳳閣下の東西朝堂¹⁸と同じで、渤海官吏が侯朝する場である。このように含元殿およびその殿前面の配置の簡略化したもので、含元殿の左右の廊や東西の朝堂が合わさったものである。同様に翔鸞閣や栖鳳閣の建築も省いた。したがって第1宮殿は含元殿のようなもので、上京宮城の外朝である。

南北廊の南端から宮城南墻にかけて、南北墻が接している。保存の良好な西側墻をみると、南北墻の中ほどで開口し、宮墻南墻の西側門と相通じている。唐大明宮は、百官入朝は正門の丹鳳の両側の建福門、望仙門から別々に宮に入る。さらに相対する光範門、昭訓門を通り抜け、さいごに西朝堂と東朝堂に集まる。これに準じて、渤海官吏は、南墻西門から入り、第1宮殿西側の南北廊中に集まり、南墻東側門から入り、第1宮殿東側の南北廊中に集まったとおもわれる。ただし東側門は発掘で、仮門であったので、そのような渤海官吏はただ正門両側の門道別々に宮に入った。

第2宮殿址は第1宮殿址の北135mのところにある。殿址の前面は南北約115mの密封された広場である。第2殿が廃棄されたあと、その殿基壇は清末民初に瓦窯がつくられ、甚だしく破壊された。1997年、その殿址の発掘がなされ、その黄土の基壇の周囲の2層の地覆石、東西93.5m、南北22.4m、地覆石の外は敷石が散在していた。基壇上の礎石の多くは無くなっていたが、礎石下の根石の大部分は遺存した。これから推測して、殿址は桁行19間、梁行4間で、同一規模のものは第1宮殿の上に存在した。第1宮殿と同様、基壇正面の左右と背面の中ほどに上殿の基壇がある。基壇東西の両側はそれぞれ短い東西墻は、その外側の南北向きの墻と連なって、東西墻の間には南北に通じる門址が見つかった。発掘で出土した大半は陶製の建築材で、「口品位」の3文字の磚がふくまれる。第1字目はわずかにのこり、「四」かもしれない。

第2宮殿は、その位置と規模からみて、大明宮の宣政殿、上京宮城の「中朝」に相当する。

第2宮殿址から北に、さらに東西約60m、南北約80mの空間の広場があり、第3、第4宮殿址はその広場の北側に位置する。第3宮殿基壇は土築で、東西約30m、南北約20m¹⁹、外側の切石は高さ約1.8mで、礎石の配列から殿址は桁行7間、梁行4間である。

第4宮殿址の規模は大きくはなく、主殿と脇殿で構成され、ともに一基壇上に建てられる。

18 馬得志「唐長安城発掘新収獲」『考古』1987-4。

19 『渤海文化』36頁図20による。

基壇の四周は磚敷きである。主殿は東西21.6m、南北15m、桁行9間、梁行5間で、回廊がめぐらされ、前廊は明廊である。内部に3室があり、中室はせまく、左右室は大きい。左右室にオンドルがつくられ、煙道があり、それは殿後方の両側の煙突とつながっている。左右の脇殿の大きさは等しい。そのうち左（東）脇殿内で炉址、殿外で排水溝がみつき、厨房と推定される。

第4宮殿址の西で、第4宮殿主殿とくらべてやや大きく、配置や構造がよく似た建物がある。第4宮殿と回廊でつながる。いずれもオンドルを備え、オンドルの煙突は殿内の左右室の西後方に設けられている。第4宮殿の東側に、その殿と対称的に計画された建物がある。

第3宮殿と第4宮殿は比較的近い。両側に相い通じる回廊（この回廊は比較的広く、外側に室の隔牆痕跡があり、内側が明廊）があり、中央部にさらに両殿の前後を一体となす廊があり、あたかも唐大明宮の紫宸殿のようである。第3宮殿はつまり紫宸殿の前殿、第4宮殿は後殿で、合わさって渤海王の内朝寢殿となった。したがってそこにオンドルを設けられている。第3・4宮殿址で、花文塼や多くの緑釉柱座、瓦、背飾がみつかった。建物がきわめて華麗であることをしめす。さらに第4宮殿の西室のオンドル上で、日本の「和銅開珎」錢幣がみつかった。

第5宮殿址は第4宮殿址と比較的離れている。それは第4宮殿址と回廊で通じていないだけでなく、中間にさらに横牆で隔てている。殿の基壇は東西約37m、南北約20m、高さ0.6mで、間口11間、奥行5間で、中央部に柱はない。第5宮殿址からさらに北に行くと、二カ所の横牆を越えると、宮城北門である。第5宮殿址は、『唐兩夾城坊考』に記載する唐大明宮玄武門と同じである。

これまでの調査、発掘資料をもとに、建築学者によってすでに宮城正門および門内5基の宮殿が復原され、それらの復原図で、渤海宮城内の主體的建築の様相が明らかにされている²⁰。

東・西区宮殿址 東区は南から北に四院がある。各院の北牆と南牆は相接する院と南牆と北牆の間はいずれも東西向きの通道がある。第1宮殿の東側の院内で、5基の宮殿址が発掘された（8～12号）。『長安志』や『唐兩京城坊考』を参照して、唐長安城太極宮太極殿の東側にかんして、大明宮宣政殿の前の東側に門下省などの機構を置き、太極殿西側、大明宮宣政殿前の西側に中書省などの機構が置かれたと記載されている²¹。

そこに渤海宣詔省などの機構があった。第2宮殿の東側の院はひろくて、整備されている。ただ中央は南に偏っていて、1基の大形建築址がある。大規模な活動場所であったとみられる。

西区は三院にわかれる。相互に牆によって隔てられている。西区の殿址は東側（東区）に多い。そのなかで第1・第2宮殿址の西側の殿址中、上述の長安城太極宮と大明宮の設置を対照させると、渤海中台省などに相当する機構があったとみられる。1964年、南辺の院の中央西寄り、倉庫状の建築、「堆房」が発掘され、大量の日用陶器などが出土した。

西区中央部の院西北角の一小院に、中区第四宮殿およびその西側に隣接する構造のようなもので、オンドルをもつ住居址が発掘された。保存状況は良好で、大量の生活容器や陶器・瓦・

20 張鉄寧「渤海上京龍泉府宮殿建築復原」『文物』1994-6。

21 平岡武夫『唐代的長安与洛陽』（資料）93、96頁、上海古籍出版社、1989。徐松撰・李建超增訂『增訂唐兩京城坊考』5-6、27-30頁、三秦出版社、1996。

銅器・鉄器などが出土した。

上京城寢殿には、一般に冬の寒冷のため、オンドルを設けられている。渤海の前の高句麗宮室建築中にあるだけでなく²²、学界で認識されているように、漢代の沃土がのこした黒龍江省東寧団結遺跡でも類似の施設がみつまっている。その後、その種の実用的な暖房施設は後までも利用されている。

2. 宮城付属区

宮城の東・西・北の三面にそれぞれ一付属区があり、宮城を中央にとりまく。東側付属区の東西幅は213m、南北朝720mである。北部の3分の1は、牆で隔てられ、単独の一院となり、建築址が見つまっている。南半部は園林で、園林の中央に南北長約190m、東西幅約110m、深さ1.5mの楕円形の水池がある。人工で掘削されている。池の南北側に小島、樓閣建築址、広い平地がある。園林区の東牆に門が開き、牆外の街路と通じている。1992年、南牆の西面で、あらたに門址が発掘された²³。

宮城西側付属区は南北長722m、東西幅220m、地勢は平坦で、建築址は未発見で、西牆は地表面に痕跡はみられない。

宮城北側付属区の東西長は847m、南北幅215m、わずかに数段の牆基がのこるだけである。付属区の北牆は郭城の北牆である。

唐の長安城にてらすと、上京宮城の東側付属区は長安城の東宮に相当し、太子の居住区である。南半部は園林で、北部の3分の1の院にすぎないことを考慮すると、西側付属区は長安城の掖庭宮にあたる。主として後宮人が住むところである。その北部に太倉があり、南部に内侍省、さらに未確認の建築址がある。北側付属区は大明宮北辺の玄武門と重玄門の間の夾城に相当する。これは「北衙」の駐兵所²⁴で、渤海上京保衛宮城の主要な軍隊がその区域内は駐留した。

3. 皇城

(1) 城牆、城門

皇城は宮城およびその両側の付属区の南に位置している。中央に幅92mの横街が隔てて通る。皇城は、東辺長447m、西辺長454m、南辺長1045m、北辺長1050m、周長2996mである。皇城内は東西両区にわかれ、中央に幅222mの南北街路がある。この街路は上京城内でもっとも広い。街路の両端は宮城で、皇城の正門である。東西両区も同じく中央部に南北街および北辺横街の交界にすべて石牆を築く。

東・西・南に城門を設ける。東・西門は皇城北側の東西横街の両端に位置する。南門は南牆の中間、北門は宮城正門に対していて、南は郭城の南壁正門に通ずる。

22 吉林省博物館「吉林輯安高句麗建築遺址の清理」『考古』1961-1。

23 黄巨林「渤海上京城御華園南門址被首次發現」『北方文物』1993-1

24 宋敏求『長安志』卷6「大明宮」条、「北面一門曰玄武門」原注曰「德宗造門樓、外設兩廊、持兵宿衛、謂之北衙」。平岡武夫『唐代的長安与洛陽』(資料) 96頁、上海古籍出版社、玄武門、すなわち玄武門。

皇城南門基壇の高さは約2mで、東西28m、南北9mで、内部は版築され、外部は切石である。基壇上に礎石を配し、前後8列の礎石で、中央部は4道の横方向の隔牆があり、毎道の隔牆の一端あるいは両端にはまた礎石1がある。4道の隔牆のない部分には、門道をつくらえる。平面は桁行7間、梁行2間で、3門道の城門建築である。

古代城門の門道の隔牆は一般にいずれも縦方向であるが、上京皇城正門のようなものはひじょうに少なく、その構造は唐長安城の興慶宮、「勤政務本樓」遺址と似ている。「勤政務本樓」遺址は興慶宮の西南角の内牆上にある。桁行5間、梁行3間。前後の柱（明柱）の中央部の両道は横向きの版築隔牆で、2個の礎石を包みこむ。隔牆の間は門道で、さらに車轍痕跡の石門檻のをとどめている。発掘者は「樓は宮牆の中央に建てられ、その真ん中は1間の門道である。樓の基壇の形態をみると、城門の基壇のようである」とみている²⁵。下は車が通り、上に樓を建て、楼内は慶典などの政治活動が進行された。

ただし「勤政務本樓」はつまるところ興慶宮の正式の城門であり、上京皇城の南門とことなり、皇城正門の中軸線上に位置する。門址は三門道があるが、各門道は幅3m前後にすぎない。宮城正門と対比すると、もちろんそれは新しく発掘された郭城北牆正門（後面の郭城部分参照）で、前述のように発掘された皇城門址の両側は、さらに広い門道と推測される。

(2) 皇城内建築

皇城東区の東西は長413m、南北幅355mで、その東北部で切石積み隔牆の遺存する三道と3カ所の建築址が発掘された。1964年発掘地点は、前・後期の2期にわけられる。その建築は同様に当時の官署とみられる。

皇城西区は東区の位置と大小の対称となっている。五道五牆が発掘された。西区は5カ所の大きさの異なる院に区画され、建築址7カ所（41～47号）がみつかった。

4. 郭城

(1) 城牆・城門

上京の郭城は横長方形を呈する。東牆長3358.5m、西牆長3398m、南牆長4586m、北牆中央は凸状に張り出し、長さ4946m、周長16288.5m²⁶。城牆は土石混交で、底部に版築の基壇がある。城外に壕がある。

郭城はもともと10門があり、南牆・北牆は各3カ所、東牆・西牆は各2カ所、南牆東門と北牆正門はすでに発掘されている。

南牆東門は単門道で、深さ6.1（西側）～6.4（東側）m、幅5.4（北端）～5.5（南端）mである。西側門墩の北面の西よりに、石積み井戸がみつかった。

北牆正門は宮城北側付属区北牆の中間に位置する。その門址は解放前にすでに一部が発掘され、基礎の部分はこのっていない。1998～1999年、中国学者の全面発掘によると、その規模

25 馬得志「唐長安城発掘新収獲」『考古』1987・4。

26 中国社会科学院考古研究所編著『新中国的發現与研究』622-623頁。『渤海文化』15頁。いずれも上京外城西牆は3406m、周長16296.5mと記す。

は大きく、プラン（布局）は宮城正門と基本的に同じである。門址の中間に東西21.9～22.6m、南北18.4m、高さ0.75mの版築基壇がある。基壇の四周に列状に切石がめぐらされる。南北両側の中央部に基壇に登る踏道がある。基壇上の建物は桁行5間・梁行3間である。基壇両側に1段長さ5.3m、幅2.2～2.3mの土石混交の連結牆があり、牆の外は東・西門道と門墩がある。西門道を例にとると、幅5.2m、長さ7mで、門道両側は幅約2.4mの門墩である。

1997年宮城北辺の付属区東側の郭城の北牆で、あらたに1城門が見つかった。前後の2期があり、それぞれ単門道がつく。前期の正門墩の南側で、門楼に上がる石の階段が発掘された。宮城北側付属区の西辺で、門址と相対する郭城の北牆上で、城壁のないところがあり、門址と推定される。そのように郭城北牆に城門5があり、それは隋唐長安城と類似し、長安城の北牆の城門は南牆にかかわる。

(2) 街路

郭城内で、街路9条が見ついている。そのなかで南北街5条、東西街4条で、城の南部にさらに1条の東西街があり、四面の城牆内に「順城街」があったと推測される。そのように1条分加えると、10条をこえることになる。城門と通じる街路は比較的ひろく、78m以上ある。そのなかで皇城正門から郭城正門に至る南北中軸大街は、「朱雀大街」と俗称され、幅は110mにたつする。その大街は郭城を東西に両半部にわける。皇城前の横街は城門に通じていないが、幅65mで、その他の街路はあきらかにせまい。街路の両側は排水溝があるのかどうか、明瞭でない。

(3) 坊市

前述の縦横の街路は郭城を長方形の区域にわける。その長方形区域において、十字形石牆か、あるいは一南北石牆が築かれる。牆の幅は1.1m、基底部幅1.8mである。十字形と南北向きの石牆によって、長方形区域は四等分あるいは二等分された。その一等分と内部は石牆の長方形区域を修せず、一居民区の里坊を構成する。そのように1里坊ごとに二面は街路に臨み、二面は牆でさえぎられる。三面が街路に臨み、一面が牆のところもある。四面が街路に臨むところもある。街路に臨むところは同様に圍牆されている。坊の東西幅は近似し、おおよそ465～530mのあいだである。ただし南北の長さ・角度の差は比較的大きい。大坊は350～370m、小城は235～265mである。大坊は宮城付属区や皇城両側に分布し、小坊は皇城以南の広大な区域に分布する。

郭城東牆内の南北一列の長方形区画は、東西幅が郭城西牆にくらべて大きい。ただ遺跡の保存状況がよくないので、内部の構造は復原しえない。各一区域はまた十字形石牆によって4里坊にわけられる。宮城東側付属区に近い両里坊は単独区域で、東西幅500m、南北長780m、四面は牆で囲まれる。牆によって分けられた小区や院、規模の比較的大きい建築址など、あわせて15カ所が発掘された。その単独区域は一般の里坊でなく、王室貴族の居住区とみられる。

そのように郭城東牆内の里坊の計算をすると、前述の単独区域の所在する2里坊を差し引くと、郭城の里坊は西半城41、東半城39、計80となる。

西城の西から第2列、北から数えて第4坊、第5坊の交点の東段に、東西長190m、南北110mで、四面に圍墻を設けた長方形区画に5カ所の房屋址基址がみつき、その区は東は大街に面する。皇城の西南方向に位置し、西市が所在した可能性がある。そのように東半城の相対する位置に、東市があったにちがいない。

(4) 仏寺

渤海は中原にならい、仏教を信奉した。その政権がはじまり、王子が入唐し、「入寺礼拝」²⁷を請うた。長安城のように、上京城内外に多くの仏寺を建立した。20世紀初めから日本人多くの調査を始めた。1960年代初めの中朝連合考古隊調査によると、9寺となり、そのうちの2寺は北墻の東・西門外、その他の7寺は城内に位置する。基本的に宮城・皇城・中軸大街で対称となる。1997年白廟子村内で舍利函が出土した。付近には大型建物址があり、仏寺があったと想定しえる。土台子村では、村の西南角、中朝連合考古隊が3号とよぶ仏寺のほか、村の西北角、東北角や東南角で、大型建物址がみついている。なかに仏寺があるということであり、上京城内外の仏寺は10カ所をこえるであろう。1975年、土台子村の南の耕地で、舍利函が発見されたが、さきの仏寺と関連する。その舍利函は内外に七重となっていて、材質は石・鉄・銅・漆・銀などである。七重目の銀盒内で、絹製の包囊でつまれた精巧な淡緑色琉璃瓶、瓶内に5顆の暗白色の石英岩製の舍利子²⁸が出土した。中朝連合考古隊の調査において、1号と9号の2基の仏寺が発掘された。第1号仏寺は渤海鎮西約400mのところの位置し、東半城の西から第1列、北から数えて第2坊の西南部にあたる。発掘は正殿にかざられたが、その殿は主殿・穿廊と東西2室の三部分からなる。平面は凸字形、主殿の基壇は東西23.68m、南北20m、桁行5間、梁行4間で、南面は東西に階段を設ける。北面の中央に階段がある。殿堂の中央部は2本の柱をへらして、凹字形の仏壇を設け、その上に9仏座を置く。その配列によると、塑像は一仏、二弟子、二菩薩、二天王（あるいは二力士）、供養人、あるいは一仏、二弟子、二菩薩、二天王、二力士である。主室の周囲で、垂脊あるいは下端を脊をささえる獸頭が4体以上みつかった。主殿の屋頂は「歇山式」である。

第9号仏寺は白廟子村の西北約600mに位置している。東南は郭城北墻西門から約250m隔て、南は郭城北墻の約68mである。発掘は正殿にかざられている。その高さは当時の地表面から1mの版築基壇、東西長16.6m、南北13.2mである。殿内の配置などは1号仏寺と基本的に同じである。

そのほか第2号仏寺、現在の「南大廟」のところで、渤海の石灯籠と石仏像がそのまま遺存している。

II 都城の発展変遷と特徴

渤海都城の発展・変遷は、おおそ3段階にわけられる。第1段階は政権建立から「天宝中」

27 『册府元龜』巻971朝貢

28 寧安県文管所・渤海鎮公社土台子大隊「黒龍江省寧安県出土的舍利函」『文物資料叢刊』2、1978。魏国忠・朱国忱・趙哲夫『謎中王国探迷—渤海国考古散記』45頁、山東画報出版社、1999。

以前の「旧国」を都とした時期である。第2段階は「天宝中」から中京を都としてから、「天宝末」に上京、785年に東京に遷都し、794年に上京にもどる時期である、第3段階は794年に上京にもどり、926年の遼による滅亡までの時期である。段階ごとにそれぞれ特色がある。

第1段階の時期は短い。都城は城子山山城、敖東城（あるいは永勝遺跡）の城址でが関連する。城址の規模はいずれも大きくはなく、建築はまた広大でない。城子山山城内に多くの半地下式穴住址が分布する。靺鞨族の「築城穴居」の伝統をしめしている。城子山山城と敖東城（または永勝遺跡）との関係、組みあわせなどは、高句麗の伝統的都城の影響を受けている。それは、この時期の渤海の都城が強烈な原始性をもっていたことをしめす。

第2段階の時期はやや長い。おおよそ50年間である。中京、上京と東京の三京の城址におよぶ。中京、東京城址の状況は基本的に明瞭である。上京は2次にわたる都で、今日知られる規模や配置、建築遺構は主として、第2次の都の状況をとどめている。ただ第1次は中京と東京の都のあいだにあり、中京、東京の状況をもとに、上京第1次の状況を推測できる。これにたいして、そのなかでもっとも明瞭なことは面積の大きさである（表1・2）

表1（単位；m）

都 城	東西	南北	周長	東西：南北
中京西古城	630	730	2720	1：1.6
上京宮城	620	720	2680	1：1.6
東京八連城	南牆 701 北牆 712	東牆 746 西牆 735		1：1.05

表2（単位；m）

都 城	東西	南北	距北牆*	備 考
中京西古城内城	190	310	70	
上京宮城 第二宮殿北区域	180	304	68	『六頂山与渤海鎮』図35から算出
東京八連城内城	218	318	160 (127+33)	

*西古城と八連城は現城址の北牆を指す。上京は宮城の北牆。

表からみて、上京宮城の形状の大きさは西古城や八連城と似ている。とりわけ西古城と近似するが、これは偶然のことではない。同一規格で造営されたことをしめす。

さらにもし西古城址の対角線が交点の中心が内城南牆正門上にあることがわかれば、予め設計されたことをしめす。そのうえ上京宮城もまた対角線の交点中心が第2宮殿址上にあるならば²⁹、これもまた偶然のことでない。もし上京宮城の創建時に西古城を模倣してつくったとすると、第2宮殿以北の中心区域は初建時の内城とし、初建時の内城門は第2宮殿の位置上にあ

29 傅熹年「中国古代院置方法初探」『文物』1999-3。

る。その初建時の内城区域の大きさは西古城、八連城の内城とくらべて、表2のように明らかに類似性をしめす。あらためて宮殿配置と構造の面からみると、同様であり、上京の第3・4宮殿はまさに西古城、八連城の第1・2宮殿に相当する。前・後の両殿の中間およびその両側はいずれも回廊でつながり、一体となっている。前者はたはいずれも規格性があり、ひろく、殿の前に比較的ひろい広場があり、当時それは上朝正殿であることをしめす。後者はやや小さく、曲尺形のオンドルを設け、両側に配殿（脇殿）があり、寝殿であることをしめす。

西古城城址の外に、大城のようなものは発見されていない。八連城のばあい、その城外の仏寺、井戸址などの遺跡を根拠にして、さらに大城が存在したと推測する人もいる。また地元の研究者は、城外にかつてさらに長大な東西方向の城牆があったという⁸⁰。つまり大城の城牆を修建したかどうかということになると、現在確定することができない。ただその種の企画の意図は、当時あったとおもわれる（ここを大城と称し、以後の上京の皇城、郭城と区別していた）。まさにこのことから八連城は西古城と異なることをしめす。すなわち内城はやや南に移り、両対角線の交点は内城南門と第1宮殿の間にある。内城の北辺と隔たって単独区域、「北大城」がある。内城の南辺に相い通じる二つの広場空間区域がつくられ、「中央三城」を形成する。中央三城の両側、また2組の対称的な区域がつくられる。あきらかに西古城にくらべて一歩前進している。

第3段階の時間はもっとも長い。794年から964年の130年におよぶ。その期間は、上京を第2次の都とし、大規模な拡大修復と建築、先ず全体計画と建築の方面で、第1次修建の都を完全な宮城とした。その後、宮城の左右後の三面に付属区を修建した。そのなかで北面の付属区はあきらかに八連城の「北大城」をもとにしている。宮城およびその左右の付属区の前面に皇城を修建した。四面が宮城でとりかこまれ、同時にそれらの左右前面に、範囲をさらに拡大した郭城を修建し、一般居民を配した。郭城の北面で、宮城東側付属区の園林に対する、広大な「玄武湖」園林をつくった。つぎに宮城内部の建物配置の面で、第1次の内城南門を第2宮殿に改建し、同時に第2宮殿の前に、第1宮殿を修建した。渤海王の上朝正殿としてつくり、もともとの上朝正殿の第3宮殿はつまり第4宮殿となり、ともに寝殿となった（今日の第3宮殿・第4宮殿址は、後に重建されたもので、位置・プランはかわっていない。上述の中京西古城、東京八連城の主要な宮殿建築はそのような可能性がある）。第1宮殿、第2宮殿の前辺に、空間性の広場と八連城内城の前面の2カ所の広場空間に相当する。すでにのべたように、その時、宮城対角線の交叉中心は第2宮殿にある。したがってかりに宮城およびその左右後付属区と皇城は一体としてあつかわれている。その対角線の交叉中心はすなわち第1宮殿の位置上にあり、それはおそらく偶然でありえないであろう。この整合性が正しいかどうかであるが、新しく修建された2基の大殿の中心地位や重要性はきわだっている。宮城内のその他の関連建築や付属区、皇城、郭城内の建築などは、いずれも第2次上京を都とした時代のもので、プランの変化や拡大は後になされた。

そのように渤海都城において、なぜ以上のような3段階の変化が生じたのであろうか。その

30 『渤海文化』12頁。

最後のプランの形成はその他の都市の影響を受けたのであろうか。これについては国内外の学界で、すでに論議されている。それは唐中原の制度・文化をまなび、隋唐長安城（隋は大興城、唐は長安城と改め、一般に隋唐長安城と称される）の影響を受けている。

具体的にいえば、上京城宮殿は長安城の宮城中央部の太極宮（隋の大興宮）相当する。上京宮城の東側の付属区は長安城の東宮、上京宮城の西側付属区は長安城の掖庭宮にあたる。上京の皇城、郭城はすなわち長安城と同じである。ただし政権等級や勢力の制限によって、上京城の面積（15・6km²）は、長安城の面積（84.1km²）の54分の10（5.4分の1）。上京城の各部分はすべて縮小してつくられる。

表3（単位；m）

	東西	南北
(1)上京城宮城	620	720
(2)長安城太極宮	1285	1492.1
(1)：(2)	0.48	0.48
(3)上京城宮城+左右付属区+横街+皇城	1045または1050	1259または1266
(4)長安城宮城+横街+皇城	2820.3	3335.7
(3)：(4)	0.37	0.38
(5)上京城郭城	南牆 4586 北牆（直）4600 平均4593	東牆 3358.5 西牆 3398 平均 3378.3
(6)長安城郭城	9721	8651.7
(5)：(6)	0.47	0.39

注1）上京城は、『六頂山与渤海鎮』、図34（上京城郭城北牆直線、長さ角度から比例側出）。長安城は「隋唐長安城和洛陽城」（『考古』1978・6）

2）長安城宮城北辺に西内苑、ただしその具体的な苑園は不明で、未計算。上京城の宮城とその付属区、横街、皇城の和のなかで、宮城の北部付属区を計算していない。

表の数字を比較すると、郭城の東西距離の縮小はきわめて少なく、上京城の外形を東西を長くするほか、その他は部分的縮小比例は基本的に同じであり、明らかに予めの精密設計による。両城のなかで、宮城・皇城の位置、中軸大街およびその両側の坊市の対称、坊市の管理、仏寺の分布などの面の類似性、すでに紹介したのでふれないが、長安城が上京にあたえた影響はきわめてふかいことをしめす。

じっさい長安城の渤海都城への影響は、上京城址だけでなく、中京西古城と東京八連城のなかにもみられ、それは渤海都城発展の第2段階にすでにおよびはじめたことをしめす。前掲の表1のように、中京西古城、上京宮城、東京八連城について比較したさいにふれたが、3基の城址の大きさは近似し、とくに上京宮城は中京西古城とほぼ同じである。ただし中京西古城は東京八連城はいずれも上京城のような完備な都城プランのように発展しなかった。それは都城の修建過程と関係がある。

『唐兩京城坊考』には大興一唐長安城は、「隋時規建、千築宮城、次築皇城、築外郭城、故唐西京宮城最在北、皇城在宮城南、外郭城又在皇城南也」と記されている。そこでいわれる宮城は、『長安志』によると、「宮城、東西四里、南北二里二百七十歩、周一十三里一百八十里、崇三丈五尺、南即皇城、北抵苑、東即東宮、西有掖庭宮」とある。長安城宮殿区のようなのである。『唐兩京城坊考』に照合すると、ある研究者はその里数について換算し、現在の考古資料と対照させ、その結果『長安志』が記する東西幅は宮殿区と東宮をあわせた広さであると指摘した³¹。現在の考古学界でいう長安城宮城はまさに宮殿区で、東宮と掖庭宮をすべて包括したものである。「隋時規建、先築宮城」は中間宮殿区あるいは東宮、掖庭宮すべてを包括したもので、当時修建が緊迫化し、三部分を一度に修成した可能性がおおきい。しかし内部はまた牆で隔て、おのおの単独区域として、その中核は習慣の宮殿区であった。その後また皇城、郭城、さらに城北の禁苑を修築した。

渤海都城の修建は、上京自体の修建ということだけでなく、中京から上京をへて東京に至り、しかるのちに再び上京にもどる。そうした歴史過程を整理すれば次のようである。

「天室中」は、渤海王は中京をもって都となし、まず長安城の宮殿区を参照して、自らの都城、和龍西古城を修建した。その計画にもとづき、さらに拡張し、当時建国まぎわであったので、その機構は小さく、実力は弱かった。かつそこに都をおく時間は長くはなかった。したがってその城中に王室官吏を住ませ、また一般居民を安置し、このため内城を修建したので、相違がある。「天室末」、上京に遷都したが、その状況と基本的によく似ている。30年後また東京に遷都した。東京琿春八連城はその以前の兩城と基本的に相似する。ただ城内のプランはわずかに改変された。ちょうどべつに大城を造営したように、わずか10年であったが、その挙動は小さくはなかったといえる。10年後、第2次上京へ帰都し、もとの城を基礎として、全体計画を実施した。第1次の上京時代、全体計画があったか否か、その可能性はなくもないが、ただし実際の造営は宮城にかぎられた。

上京城の宮城、宮城付属区、皇城、郭城の間関係などについて、未だ分析されていない。実地の調査にもとづいて、宮城四周の城牆の幅・高さ、その隣接する付属区域の城牆などの形跡分析から、宮城がまず最初に築成され、宮城付属区、皇城や郭城はいずれも宮城より後につくられたが、建築は基本的に同時期であった。上京城の北辺の地勢は明らかに低くなっていて、西北はまた牡丹江支流に面するので、郭城牆の西北角はただ内におさまらざるをえない。ただし宮城北辺で保護補強されている。また外にむかって一部分が突出し、宮城北側の付属区が形成されている、郭城が広く、高く築造されたため、宮城付属区と皇城の城牆は低くなり、狭まっている。それらの城牆はみな完成以後、上京城は長安城と同じように王室、官府、居民それぞれが分離し、隋文帝初創の大興城時代の意図の「公私友便、風俗齊肅」のように完全に到達した³²。

31 徐松撰、李建超増訂『増訂唐兩京城坊考』2-3、27-30頁、三秦出版社、1996。

32 『長安志』卷七「自西漢以後、至于晉、齊、梁、陳、併有人家在宮闕之間、隋文帝以為不便于民。于是皇城之內惟列府寺、不使雜人居止、公私有便、風俗齊肅、實隋文新意也」。そのなかで「不便于民」は、『唐兩京城坊考』卷一に「不便于事」と記されている。

上京城宮殿正門と門内主要な宮殿の建築と役割について、長安城のもの宮城の太極宮や大明宮の影響を受けているということである。文献によると、太極宮正門の承天門は、「外有朝堂、東有肺石、西有登聞鼓」と記されている³³。「若元正、冬至大陳設、燕会、赦過宥罪、除旧布新、受万国之朝貢、四夷之賓客、則御承天門以听政（蓋古之外朝也）」³⁴。承天門の内に太極殿があり、殿の左に門下省、史館、宏文館などの機構、右に中書省、舍人院などの機構³⁵があった。「朔、望則座而視朝也（蓋古之中朝也）」。太極殿の北は兩儀殿、隋唐皇帝はここにある。「常日听政而視朝焉（蓋古之内朝也）」³⁶。

太極宮は唐代にあって、宮城としては長くなく、高宗の時代、大明宮に移り、その後玄宗時代に、興慶宮を宮城外に置いたのをのぞいて、その他唐朝皇帝はみな大明宮を宮城とした。渤海政権は長安城を手本として上京を計画した。ただし以後長期にわたって、唐と交往し、朝見したのは大明宮においてであり、大明宮の建築は必然的に、上京城を続けて修建し使用するのに影響をあたえた。

文献に「経安史之乱、肅宗執政后、皇帝起居大明宮、故大赦和改元の詔令在丹鳳門宣布」とある³⁷。配置からみると、丹鳳門は承天門のことである。ただし大明宮は後に建てられたもので、丹鳳門の前に、居民区の里坊があり、丹鳳門街を特別に開くとしても、承天門の前のひろさや規模におよばない。したがって承天門前の朝堂、肺石、望聞鼓などが設置、皇帝にかかわる政事活動は、すなわち丹鳳門内の含元殿に移った。

含元殿は丹鳳門内の正殿で、「（殿即龍首原之東蹟也。階上高于平地四十余尺、南去丹鳳門四百余步、東西廣五百步。今元正、冬至于此听朝也）。夾殿兩閣、左翔螭閣、右栖鳳閣。（与殿飛廊相接夾殿、東宥通乾門、西宥觀象門。閣下即朝堂、肺石、登聞鼓、如承天之制）」³⁸。含元殿の発掘調査によって、1950年代末に探査と発掘、近年また大規模な発掘が進行した³⁹。さらに建築自体の観察から、含元殿は殿に属し、門は相互に結合する形式で、兩閣は双閣に類似する。このようにみると、含元殿は丹鳳門ともに、もともと承天門の制度と役割をかねそなえたもので、すべて「外朝」に属すると思う。

含元殿の後は宣政殿で、殿外の東に門下省、西に中書省などの機構があり、これは太極殿と同じである。ただし太極殿のようなものでなく、「朔望則座而視朝」、あるいは「天子常朝所也」である。前・中・後にわけると、宣政殿は「中朝」に属する。

宣は政殿の後は紫宸殿であることを指す。その殿は「内朝正殿」⁴⁰、またはこれを「天子便殿」と名づける。「不御宣政而御便殿曰‘入閣’」⁴¹で、紫宸殿の官吏に召され入ることはひじょうに光栄なことであった。考証をもとに、紫宸殿が前後の殿にわかれ、前殿は「座朝門政」、

33 『長安志』巻六、平岡武夫『唐代的長安与洛陽』（資料）93頁、上海古籍出版社。

34 「唐」李林甫等撰・陳仲安点校『唐六典』巻七、217頁、中華書局、1992。

35 徐松撰・李建超増訂『増訂唐兩京城坊考』5-6、27-30頁、三秦出版社、1996。

36 「唐」李林甫等撰・陳仲安点校『唐六典』巻七、217頁、中華書局、1992。

37 馬得志・馬洪路『唐長安宮廷史話』60頁、新華出版社、1994。

38 「唐」李林甫等撰・陳仲安点校『唐六典』巻七、218頁、中華書局、1992。

39 中国社会科学院考古研究所西安唐城工作隊「唐大明宮含元殿遺址1995-1996年発掘報告」『考古学報』1977-3。

40 徐松撰・李建超増訂『増訂唐兩京城坊考』5-6、27頁、三秦出版社、1996。

41 徐松撰・李建超増訂『増訂唐兩京城坊考』5-6、27-30頁、三秦出版社、1996。

後殿は「退朝休息」ところである⁴²。紫宸殿は両儀殿と相對するが、兩儀殿のような「常日听政」ではなかった。

渤海上京宮城の正門の位置は、門外の計画、配置はいずれも承天門のようである。第1宮殿の位置、建築はまた含元殿のようであり、したがって上京宮殿正門は第1宮殿と同じ「外朝」に属する。

第2宮殿の規模は広大で、宣政殿と同じで、渤海王が「常朝之所」であり、中朝に属する。第2宮殿の前・左右の両側および第1宮殿の両側の建築址は、宣政殿前左右両方の門下、中書の類の機構に相当する。

第3・第4宮殿は、紫宸殿のように「内朝」に属する。両殿をあわせると、紫宸殿の前、後殿に相当する。

このことから、渤海が都城を造営し、完成させたことは、渤海の中原の先進制度や文化を吸収し、融化したことなどをよくしめしている。さらに吸収・融化の過程で、渤海三代の文王大欽茂は率先して、その役割をはたした。大欽茂は、737～793年の50年間在位したが、それはまさに渤海都城の発展の重要な時期であった。文献に、大欽茂は継位をはじめ、多くにわたって唐王朝に使臣を派遣したことが記載されている。中原の制度と文化を全面的に学び、推行了した。したがって都城の建設は必然的に先ず最初におこなわれた。その後、歴代王の増修、改建をへて、ついに渤海上京の各建築や施設は完備し、制度化された。さながら当時の中国東北地区はまた繁栄繁盛した小長安城となした。渤海と中原は「疆里虽重海、車書本一家」の密接な関係をものがたっている。

【要旨】

渤海は紀元698年～926年、靺鞨族を主体として中国の東北地方を中心として、朝鮮半島の東北部、ロシアをふくめた広大な地域に建立した民族的地方政権であった。文献と考古資料によると、渤海政権が存在した229年間に、都城は四度、遷都した。初期の都は敦化で、史書に「旧国」とみえる。天宝年間（742～756年）に、中京の西古城（吉林省和龍）を都とし、天宝末に上京（黒龍江省安寧）に変遷し、785年に上京から東京八連城（吉林省琿春）に遷都した。794年に再び、上京にもどり、その後926年、遼に滅ぼされるまで上京を都とした。上京城は2次にわたり都となり、もっとも長く、規模も最大で、計画プランや建築も完備し、都城と建築の面において、「海東盛国」といわれた文化様相をよくあらわしている。

渤海「旧国」の都城について、敦化に城山子山城、敖東城、永勝遺跡があり、具体的にどの城址や遺跡にあたるかは、将来の考古学的調査が必要である。その他の三つの都城の計画プランは基本的に明らかである。中京の西古城以来、いずれも隋唐都城の長安城を模倣した計画プランである。そのうち中京西古城と東京八連城は都の時期が比較的短かったので、その規模や計画プランは後の上京城の宮城に相当する。

42 馬得志・馬洪路『唐長安宮廷史話』145頁、新華出版社、1994。

ただしいずれも長安城宮城の太極宮を模倣している。渤海上京城は都の時期が長く、宮城周囲に付属区、皇城、規模を拡大した郭城、王室の居する宮城、皇城に官衙を配置し、郭城に民を住ませた。郭城内は、数条の東西南北に直交する街路と街路には石築城牆で画された里坊で画した。そのうち宮城、皇城と中軸の大街の両側のいくつかの里坊内にはまた仏教寺院が建てられた。そのように隋唐都城の長安城の計画プランと設置と、基本的に同じであるが、ただ渤海政権の等級は低く、その都城の規模は、隋唐中央政権の都城とくらべて小さい。

上京城宮城の城門と宮殿は、宮城正門の位置、門外の企画、計画プランは長安城の太極宮正門の承天門、第1宮殿の位置、建築は大明宮含元殿のようである。したがって上京宮城の正門と第1宮殿は「外朝」に相当する。第2殿の規模は広大で、大明宮宣政殿の同じで、渤海王が「常朝之所」で、「中朝」にあたる。第3・4宮殿は大明宮紫宸殿のようで、「内朝」に属する。両殿をあわせると、紫宸殿の前・後殿に相当する。

等級の厳格な封建社会のなかで、都城の企画計画プランは重要な文化水準をしめし、なおいっそう重要な政治制度をあらわしている。渤海都城の計画プランは極力隋唐長安城を模したので、渤海と中原の「疆里虽重海、車書本一家」の密接な関係にあることをしめしている。

【コメント】

小方 登

京都大学の小方です。私は最近、米国の衛星写真を利用して、渤海の都のプランを検討し、研究成果を明らかにしました。衛星写真による研究は、いわば大局的な観点からのものでありますので、魏先生の考古調査に基づく詳細な研究とは、相互に補完する関係にあるといえます。

魏先生のご発表・ご成果を一言で要約するならば、古代東アジアの都城プランに、発展モデルを導入した、ということになるでしょう。《都市は発展する》という観点は、近代の都市に関して、いわば常識であります。1990年代に入り、中国の北京や上海は、めざましいスピードで発展し、周辺に拡張しています。日本でも1980年代までは、都市が拡張するのは当然と考えられていました。しかし、その後拡張のスピードが落ちたため、予想を誤った不動産開発業者は、困るようになりました。

《都市は発展する》という考え方は、近代都市を扱う都市社会学や都市地理学では、理論に深く組み込まれており、たとえばバージェスの同心円地帯モデルでは、ある時点での土地利用などが織りなす空間パターンは、都市の発展過程を反映していると考えられます。

しかし、中国の唐の長安をモデルとする東アジアの都城を考える場合、都市の発展・拡張は、必ずしも自明ではなかったように思います。つまり、日本の奈良の都、平城京はできたときにすでに大内裏と京城をそなえた完成したプランを持っていたのであり、別の場所に都が移るまで、プランに大きな変化はなかったと考えられているのではないのでしょうか。

ここで、観点を変えて、東アジア以外の古代都市に目を向けてみましょう。この衛星写真は、トルクメニスタンのメルヴの古代都城です。丸く見える内城がエルクカラ、その南側の大きな